開会挨拶

皆様こんにちは。日本海事センター会長の　宿利正史です。

例年になく今年は残暑が厳しく、暑い日が続いておりますが、そのような中、また、皆様それぞれにご多用の中、本日の第１１回 JMC 海事振興セミナーに、会場及びオンラインで多数ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。心から感謝申し上げます。

日本海事センターは、海事分野の中核的な公益法人として、産官学の関係者と密接な連携・協働を図り、内外の諸情勢に的確に対応しつつ、海事分野に関する調査研究活動等を行っておりますが、その一環としてこの JMC 海事振興セミナーを開催しております。

本日のセミナーでは、「東アジアにおけるサプライチェーンの拡大と国際コンテナ港湾の変貌」というテーマをとりあげました。

さて、ご案内にも書きましたように、東アジアの経済発展はめざましく、GDP の規模で既に世界の GDP の 3 割を占めておりまして、米国や EU の GDP の規模を超えるに至っています。このような経済発展を支える要素はいろいろありますが、一番分かりやすいインフラの代表例は国際コンテナ港湾ではないかと思います。東アジアの主要国では、例外なくこの国際コンテナ港湾が大規模化し、しかも高度に機能強化されているということは、本日の男澤先生のお話の中でも、また他の講演者のお話の中でも出てくると思いますが、紛れもない事実であります。

一方で、我が国の港湾はどうかといいますと、誠に残念な事実ではありますが、コンテナの取扱量は伸び悩んでおり、基幹航路の寄港回数は明らかに減少しているわけでありまして、仮に今のような状況が続けば、我が国にとって必要不可欠なサプライチェーンの維持・強化に支障を来しかねない。心配のし過ぎであれば良いのですが、事実としてはそういう懸念があるわけであります。

私は先週の金曜日に、韓国の釜山新港を見学してまいりました。かつて 2009 年に、建設途上ではありましたが既に一部供用開始していた釜山新港を見学する機会がありまして、その時にも非常に大きな驚きと危惧を持ったわけでありますが、今回 15 年振りにその後の釜山新港の進展を目の当たりにして、感ずるところは極めて大きなものでありました。今般釜山に行きましたのは、今年の３月に、日本海事センターと運輸総合研究所、それから韓国の海洋水産分野の大規模なシンクタンクであり政策調整機関でもあります韓国海洋水産開発院（KMI）と高麗大学海上法研究センター（KUMLC）の四者で、今後の共同活動・共同研究について MOU を結び、最初は 3 月に東京で、先週は 2 回目の交流セミナーを釜山で開催しました。この交流セミナーに出席し、その翌日に釜山新港を見てきたわけであります。

釜山新港の現場を見て、また、釜山港湾公社の方から説明を聞きましたが、私が最

も大きなインパクトを受けましたのは、今年の４月にユン大統領出席のもとでオープンしました釜山新港第７埠頭コンテナターミナルであります。後ほど福山研究員の発表の中でその動画を見ていただきますので、それをご覧いただければ一目瞭然でありますから細かくは申し上げませんが、文字どおり「完全自動化」された大規模コンテナターミナルが供用されておりました。さらに釜山新港については、西側に大規模に展開するというプロジェクトが現在進行中であるということで、私の実感としては、日本は周回遅れではなく二周回遅れになっているのではないかと実感した次第であります。

国際的なハブとしてのコンテナ港湾の整備・機能強化は、グローバルサプライチェーンを大きく変革するものであり、その国にとっては外貨獲得はもちろん、産業競争力の強化や国民の生活の質の向上という観点から極めて重要な、国力に直結する取組みであります。

東アジアの国際的なハブ港として戦略的な取組みが進められている釜山新港の現状を見るにつけ、私は韓国と比べて差が開くばかりの日本の港湾の現状について強い危機感を感じました。そのことをお伝えしておきたいと思います。

さて、本日はこのような東アジアの主要国に共通する国際コンテナ港湾の整備・機能強化の取組みの中で、これから日本のコンテナ港湾をどのようにしていくのか、その戦略、今後の展開について皆様と共に考えてみたいと思います。このような議論・検討を重ねながら、今後速やかに具体的な政策・取組みに活かしていかないと、悠長に構えている余裕は日本にはないのではないかと私は思っております。

本日は、まず最初に、日本港湾経済学会会長の男澤教授から、続いて当センターの福山客員研究員から講演していただきます。

次に、国土交通省港湾局の澤田港湾経済課長から政府の取組みや考え方について、さらに阪神国際港湾株式会社の木戸社長から講演していただきます。

その後、男澤教授にモデレーターをお願いし、講演者とパネルディスカッションを、また、ご参加いただいている皆様との質疑応答を予定しておりますので、是非この２時間半を実りあるセミナーにすることができれば幸いだと考えております。

本日は、多くの皆様にご参加いただき誠にありがとうございます。